

## 藤壺の宮試論

西 嶋 千 保

## 一 序

藤壺の宮は先帝の後腹の第四皇女として生まれ、中宮、国母となり、果ては准太上天皇という位に即き、女院と称される。そうした最高の血統、地位に加えて、容姿端麗で聡明、教養も嗜みも深く、思いやりのある非の打ち所がない女性である。そのような素晴らしい女性であるため、源氏は藤壺の宮を理想の恋人として幼い頃から憧憬し続ける。よって読者も宮を源氏の恋人として認識しがちに感じる。しかし物語を読み進めていくと、そうしたイメージとはあまりにかけ離れた藤壺の宮を見ることがなる。例えば濡標の巻で前斎宮の身の振り方について源氏から相談を受けた宮が、朱雀院の意向は無視して冷泉帝の妃として入内させるようにと答えるところなどはなやかな女性らしさなどみじんも感じられない。理想の恋人ではなく上皇にも勝る権力者の発言である。このように源氏の恋人とい

う面だけでは藤壺の宮を語り尽すことはできない。真の藤壺の宮がどんな女性であるかを知るためには他の登場人物の主観や読者の思い込みによる藤壺の宮像に捕われてはならない。藤壺の宮に与えられた三つの役割、則ち桐壺帝の後妃・源氏の恋人・冷泉帝の母后のそれぞれにおける発言・行動・心理などを焦点に、藤壺の宮が一人の人間または女性としてどのように生きたのかを物語にあるところを客観的に把握し、論じたい。

## 二 桐壺帝の後妃としての藤壺の宮

結論からいうと、桐壺帝の後妃としての面からは藤壺の宮の人間性は描かれていない。登場の場面では、入内までの運びの説明、亡き桐壺の更衣に似ていたために帝寵を得たこと、幼い源氏が藤壺の宮を慕ったことなどが語られるが、宮自身の人柄などについては全

く言及していない。后妃としての宮の役割は、名目上の桐壺帝の皇子を産んだこと、立后したこと、桐壺院崩御の日まで側近く仕えたことぐらいである。后妃としての発言、心理がかるうじて見えるのは、まず、源氏との密通による懐妊を知らない桐壺帝が、「いとどあはれに限りなうおぼされて、御使などのひまなきも」(若紫)、藤壺の宮は、「そら恐ろしう、ものをおぼすこと、ひまなし」(同)という場面である。それから、桐壺帝が藤壺の宮のために試案を催した夜、「今日の試案は、青海波に事みな尽きぬな。いかが見たまひつる」(紅葉賀)との帝の言葉に藤壺の宮は、「あいなう、御いらへ聞こえにくくて」(同)、「異にはべりつ」(同)と答える場面である。これが唯一の桐壺帝との会話である。また、出産後、

命長くもと思はずは心憂けれど、弘徽殿などの、うけはしげにのたまふと聞きしを、むなく聞きなしたまはましかば人笑はれにやとおぼしつよりてなむ、やうやうすこしづつさはやいたまひける。(紅葉賀)

という場面がある。これは妃としての弘徽殿の女御に対する対抗意識と考えられる。さらに、桐壺院崩御後、「馴れきこえたまへる年ごろの御ありさまを」(賢木)、宮は、「思ひ出できこえたまはぬ時の間なき」(同)という場面である。以上が后妃としての藤壺の宮の数少ない言動・心理描写である。その上、宮が入内してから桐壺院崩御までの十年以上の間、宮と帝は一度も歌を詠み交わしていない。こうしたところからも、宮の後妃としての役割が他の二つの役割に比べて重くないことが分かる。ゆえに藤壺の宮が桐壺帝の後妃

として活躍する場面はほとんどないといってよく、これでは宮を観念的にしか捉えられない。

### 三 源氏の恋人としての藤壺の宮

本章以後は物語の流れに沿って述べる。まず、初めて源氏との直接的接触が描かれる若紫の巻での密通の場面から考察を始める。

宮も、あさましかりしをおぼしいづるだに、世ととももの御もの思ひなるを、さてだにやみなむと深くおぼしたるに、いと心憂くて、いみじき御けしきなるものから、なつかしうらうたげに、さりとてうちとけず、心深うはづかしげなる御もてなしなどの、なほ人に似させたまはぬをなどか、なのめなることだにうちまじりたまはざりけむと、つらうさへぞおぼさる。(中略)

やがてまざるわが身ともがな

と、むせかへりたまふさまも、さすがにいみじければ、世語りに入や伝へむたぐひなく

憂き身をさめぬ夢になしても

密通における藤壺の宮の心情には触れられていないが、この宮の歌のとおりに宮は密通露頭を恐れ、自分の評判のことに気を遣って源氏に恨みを述べている。しかし宮が源氏を憎んでいるかといえばそうではない。前回の逢瀬を「あさましかりし」ことと思ひ、それで終わりにしようと思ひ深く決心していても、忍び寄ってきた源氏に

対して、「なつかしうらうたげに、さりとてうちとけず、心深うはづかしげなる」態度をとる藤壺の宮には多少なりとも源氏に許す気持ちがあったと思われる。阿部秋生氏は、

源氏であろうと、他の男であろうと、男が女房を語らうて女の居室に近づいて来てしまった時、この時代の女にはその男を拒む術はすでになかったのではあるまいか。(中略) 源氏を拒まなかつたことは、源氏に愛情を持っていたことを意味するとは言いがたいのだと思う。<sup>(全)</sup>

と、述べられたが、拒もうと思えば拒み通せることは、後の賢木の巻での源氏拒否からも分かることである。やはりこは源氏を少しでも好ましく思っていることが隙となつて、結果密通の罪を犯したと解釈するべきであろう。藤壺の宮は気の晴れぬまま懐妊に気付く。源氏の子を身籠もつたのだ。自身の懐妊について宮は、「あさましき御宿世のほど心憂し」(若紫)と感じた。源氏への思いはあつても、その人の子を宿して嬉しいなどとはとても思えないのであつた。紅葉賀の巻での試案の折、源氏の美しい舞姿を見て藤壺の宮は、「おほけなき心のなからましかば、ましてめでたく見えまし」と、源氏の藤壺の宮への恋心がなかつたら良いのになと思ふのだが、

つとめて、中将の君、

いかに御覧じけむ。世に知らぬ乱りごちながらこそ。

もの思ふに立ち舞ふべくもあらぬ身の

袖うち振りし心知りきや

あなかしこ。

とある御返り、目もあやなりし御さま、容貌に、見たまひ忍ばれずやありけむ、

唐人の袖振ることは遠けれど

立居につけてあはれとは見き

おほかたには。

と、返歌する。「袖を振って舞つた心のほどを汲んでいただけましたか」との問いかけに「あなたの舞はしみじみと感じ入りました」と応じているのだから、源氏の舞や源氏自身に対して幾何かの「あはれ」|| 情趣・愛情を感じているのである。ここで唯一度だけ、藤壺の宮は源氏への恋情を吐露する。

出産を控えて、藤壺の宮の源氏に対する態度はやや変化した。三条の宮に宿下がりした宮を源氏は訪問するが、試案の折の色よい返事と打つて変わって、応答するのは女房達のみで宮は対面しない。源氏とのことをますます情けなく思う宮は、手引きする女房をも疎ましく感じるのであつた。

出産予定の十二月が過ぎ、一月も過ぎ、二月十余日にやっと男皇子が生まれる。幸い物怪の障りによる出産の遅れと誤解され、弘徽殿の女御への対抗意識から体調の回復に努める。しかし若宮が源氏にそっくりであることが新たに藤壺の宮の心配の種となる。

宮の、御心の鬼にいと苦しく、人の見たてまつるも、あやしかりつるほどのあやまりを、まさに人の思ひとがめじや、さらぬはかなきことをだに、疵を求むる世に、いかなる名のつひに漏り出づべきにかとおぼし続けるに、身のみぞいと心憂き。(紅

## 葉賀)

子供を産んだといつても、まだ母の自覚などなく、唯々自身を情けなく思い、我が身を心配するのみである。源氏の、三条の宮に参り若宮を見たという申し出ももちろん断る。若宮誕生後、これまでに以上に警戒心が増し、源氏の訪れについても、「人のもの言ひもわづらはしきを、わりなきことにのたまはせおほ」(紅葉賀)すのであった。

桐壺帝の藤壺の宮と若宮への寵愛は並々ならぬものであった。しかし宮はそのような帝の様子につけても、「胸のひまなく、やすからずものを思」(紅葉賀)し、源氏と若宮がよく似ているとの帝の言葉に、「わりなくかたはらいたきに、汗も流れてぞおはしける」(同)のである。そうした折に源氏からの文が届く。

「よそへつつ見るに心はなぐさまで

露けさまさるなでしこの花

花に咲かなむと思ひたまへしも、かひなき世にはべりければ」  
とあり。さりぬべき隙にやありけむ、御覽せさせて、「ただ塵ばかり、この花びらに」と聞こゆるを、わが御心にも、ものいとあはれにおぼし知らるるほどにて、

袖濡るる露のゆかりと思ふにも

なほ疎まれぬやまとなでしこ

藤壺の宮の歌の「疎まれぬ」の「ぬ」について完了説と否定説がある。例えば、『日本古典文学大系』は完了、『日本古典文学全集』は否定ととっている。私は完了説を支持する。なぜならば出産から

この場面までで藤壺の宮が若宮をかわいがる様子が描かれていなく、却って源氏と瓜二つの若宮を産んで、自分にとってどんな不名誉な評判がたつだろうかと、自分の身を案ずるのみであり、若宮への心配などは全くない。この時点の藤壺の宮にあるのは若宮ゆえの苦悩であり、その後に見せる意識的な母性などないといつてよい。よって宮の歌は、「源氏の子である若宮をいとおしむ気持ちになれない」と解釈する方が自然である。

七月、藤壺の宮は後の位に即く。

七月にぞ后ゐたまふめりし。源氏の君、宰相になりたまひぬ。

帝、おりるさせたまはむの御心づかひ近うなりて、この若宮を坊にと思ひきこえさせたまふに、御後見したまふべき人おはせず。御母かたみな親王たちにて、源氏の公事しりたまふ筋ならば、母宮をだに動きなきさまにしおきたてまつりて、つよりにとおぼすになむありける。(紅葉賀)

現東宮の生母弘徽殿の女御を超えての立后には桐壺帝の深い配慮があった。藤壺の宮はやがて立坊する若宮の後ろ楯のために中宮という公の地位を授けられたのであった。

翌年二月、内裏で桜の宴が催された。作詩にも舞にも群を抜いた源氏の麗しい姿に、

中宮、御目のとまるにつけて、春宮の女御のあながちに憎みた

まふらむもあやしう、わがかう思ふも心憂しとぞ、みづからおぼしかへされける。

おほかたに花の姿を見ましかば

つゆも心のおかれまじやは(花宴)

この歌は反実仮想の歌である。つまり實際は「おほかたに花の姿を見」ていないから、「心のおかれ」るのである。藤壺の宮は源氏の自分への恋心を迷惑に思いながらも心に懸けずにはいられない。

それでも自分のそのような思いを、「心憂しとぞ、みづからおぼしかへされける」宮は、その夜、殿舎の戸口を全て鎖して源氏に付ける隙を与えないのであった。

葵の巻において、葵の上の死後、藤壺の宮のお悔やみの言葉に対して源氏が、「たびたびの御消息になぐさめはべりてなむ」と答える場面がある。宮自身が文を書き送る様子は描かれていないが、この言葉によると妻を亡くした源氏を思いやっていたようである。これを源氏の恋人としての行為ととるか桐壺院の後(源氏の義母)としての行為ととるか微妙なところであるが、私はここまでを源氏の恋人としての藤壺の宮と見る。根拠は次の章で述べることにする。

藤壺の宮は源氏を恋していた。源氏と通じた自分を恥じ、源氏の恋心を迷惑に思い、出産を控えて源氏への警戒心を増しても、やはり心に懸けていた。それは否定できない。しかし源氏の恋人としての面で大きいのは、源氏への慕情よりも密通露頭に対する恐怖・不安である。それは宮の心理を追ってゆけば分かる。先の引用と重なる部分もあるが以下に列挙する。

- (1) 宮も、なほいと心憂き身なりけりとおぼし嘆くに、(若紫)  
 (2) 人知れずおぼすこともありければ、心憂く、いかならむとのみおぼし乱る。(同)

(3) あさましき御宿世のほど心憂し。(同)

(4) 御使などのひまなきもそら恐ろしう、ものをおぼすこと、ひまなし。(同)

(5) 宮の御けしきも、ありしよりは、いとど憂きふしにおぼしおきて。(紅葉賀)

(6) 宮、いとわびしう、このことにより、身のいたづらになりぬべきこととおぼし嘆くに、(同)

(7) 命長くもと思はずは心憂けれど(同)

(8) 宮の、御心の鬼にいと苦しく、(同)

(9) いかなる名のつひに漏り出づべきにかとおぼし続けるに、身のみぞいと心憂き。(同)

(10) 宮はいかなるにつけても、胸のひまなく、やすからずものを思はず。(同)

(11) 宮は、わりなくかたはらいたきに、汗も流れてぞおはしける。(同)

(12) わが御心にも、ものいとあはれにおぼし知らるるほどにて、(同)

(13) 皇子は、およすけたまふ月日に従ひて、いと見たてまつりわきがたげなるを、宮いと苦しとおぼせど、(同)

(14) 中宮、御目のとまるにつけて、(中略)わがかう思ふも心憂しとぞ、みづからおぼしかへされける。(花宴)

(葵の巻には藤壺の宮の心理描写なし)

以上が若紫の巻から花宴(葵)の巻までの藤壺の宮の主な心理で

あるが、そこから分かるのは、宮がいかに自分や源氏との関係を情けなく思い、我が身の破滅に怯え、良心の呵責に苦しんでいるかということである。源氏への慕情などはこれらの前では微々たるものである。このような苦悩が恋心よりも強いから、出産前あたりから源氏を避けるようになったといえる。

また、源氏の恋人としての藤壺の宮の言動・行動は少なく、心理描写もけつして詳らかとはいえない。次章で考察するが、賢木の巻以降のそれらとは比較にならない。源氏への慕情を宮自身の意志に基づいて吐露するのは一度だけであり、後は数少なく、簡単な心理描写と歌、または物語の叙述でもって何とかその様子を知り得るのみである。己の意志に基づいた発言・行動にこそ、その人間性、人格が表れるものだが、そうした観点に立つなら、藤壺の宮自身の意志に基づいた発言・行動が少ないということは、とりもなおさずその人間性は見えないということだ。ゆえに源氏の恋人としての藤壺の宮はその人格のほんの一端が窺い知れるのみであり、物語の表面にはっきりと姿を現しているとはいいがたい。これでは宮の人間まはは女性としての実態は捉えられない。しかし、これ以後一変して藤壺の宮はその意志や人間性を明確に表わすようになるのである。

(注1) 「藤壺の宮」(「實踐國文學」第二十九号 七頁)

(注2) 藤壺の宮の歌について否定説をとる斎藤曉子氏は

二人の罪から生れた子と思えば疎まねばならぬのに、やはり疎むことのできぬ可愛い可愛いなでしこだったという悲哀や痛みの伴った皇子への愛を述べているのだと思う。そして藤壺

が皇子への愛を源氏に言う時それはそのままそっくり源氏への愛を言うことになるのである。これが藤壺の愛の特異性なのであり、さしずめこの返歌はその嚆矢といふべきであろう。(『源氏物語の研究 光源氏の宿病』・十七頁)

と述べられたが、それでは同氏の

妊娠を自覚して以来の、これまでとは打って変わった厳しく弛まない藤壺の源氏忌避の堅固さは、帝に対する罪責の意識や、東宮への慮りだけではない。藤壺の拒絶の最と奥には、彼女が肉体そのもので味わい尽くした絶え間ない露頭の恐怖、破滅の予感、それを己れ一人で担い耐えねばなるぬ孤独と不安、そうした到底源氏の推察能わぬ体験に根ざした、源氏その人への肉体を守る防御心があったのである。(同・二三頁)

という観点と矛盾する。そうした観点に立つならば、この歌は完了と解して、「疎ましい」と解釈するべきである。

#### 四 冷泉帝の母后としての藤壺の宮

(一)

藤壺の宮はいつから母として生きるようになったのか。まずそこから検討してゆきたい。

若宮誕生をはさんで類似した出来事が起こる。

(1) 源氏が忍び寄る(密通)……若紫

(2) 試楽、源氏舞う……………紅葉賀

(3) 若宮誕生……………紅葉賀

(4) 花宴、源氏舞う……………花宴

(5) 源氏が忍び寄る……………賢木

先の引用と重なる部分もあるが、試楽と花宴、若紫の巻と賢木の巻での源氏闖入の、それぞれの藤壺の宮の態度・心理・発言・行動・歌を比較する。

(一) 試楽と花宴

○試楽における心理

おほけなき心のなからましかば、ましてめでたく見えましとお

ぼすに、(紅葉賀)

○花宴における心理

中宮、御目のとまるにつけて、春宮の女御のあながちに憎みた

まふらむもあやしう、わがかう思ふも心憂しとぞ、みづからお

ぼしかへされける。(花宴)

○試楽における歌

(源氏への返歌)

唐人の袖振ることは遠けれど

立居につけてあはれとは見き(紅葉賀)

○花宴における歌

(独詠歌)

おほかたに花の姿を見ましかば

つゆも心のおかれましかば(花宴)

試楽においては、源氏の恋心がなければよいと思いながらも、源氏の舞をしみじみと感じ入ったと表明する

花宴においては、自分が密かに源氏に惹かれていることを情けなく思い、何の負い目もなく源氏を見るのであったら良いのにと詠んだ。

どちらにおいても藤壺の宮が源氏を思っていることは確かであり、そこに特筆すべき変化や差異は感じられない。

(二) 若紫の巻と賢木の巻における源氏闖入

○若紫の巻での態度

いと心憂くて、いみじき御けしきなるものから、なつかしうら

うたげに、さりとてうちとけず、心深うはづかしげなる御もて

なし

○若紫の巻での心理

(心理描写なし)

○若紫の巻での歌

世語りに人や伝へむたぐひなく

憂き身をさめぬ夢になしても

○賢木の巻

ここでは本文をそのまま引用する。

まねぶべきやうなく聞こえ続けたまへど、宮、いとこよなくも

て離れきこえたまひて、果て果ては御胸をいたうなやみたまへ

ば、近うさぶらひつる命婦、弁などぞ、あさましう見たてまつ

りあつかふ。(中略)宮は、ものをいとわびしとおぼしけるに、

御氣あがりて、なほなやましうせさせたまふ。(中略)けはひしるく、さと匂ひたるに、あさましうむくつけうおぼされて、やがてひれふしたまへり。見だに向きたまへかしと、心やましうつらうて、引き寄せたまへるに、御衣をすべし置きて、るざりのきたまふに、心にもあらず、御髪の取り添へられたりければ、いと心憂く、宿世のほどおぼし知られて、いみじとおぼしたり。男も、こころ世をもてしづめたまふ御心みな乱れて、うしざまにもあらず、よろづのことを泣く泣く怨みきこえたまへど、まことに心づきなしとおぼして、いらへも聞こえたまはず。ただ、「こころのいとなやましきを、かからぬをりもあらば聞こえてむ」とのたまへど、尽きせぬ御心のほどを言ひ続けたまふ。さすがにいみじと聞きたまふ節もまじるらむ。あらざりしことにはあらねど、あらためていとくちをしうおぼさるれば、なつかしきものから、いとよのたまひのがれて、今宵も明けゆく。(中略)

「逢ふことのかたきを今日に限らずは

今幾世をか嘆きつつ経む

御ほだしにもこそ」と聞こえたまへば、さすがにうち嘆きたまひて、

ながき世のうらみを人に残しても

かつは心をあだと知らなむ

はかなく言ひなさせたまへるさまの、言ふよしなきこちすれど、人のおぼさむところもわが御ためも苦しければ、われにも

あらで出でたまひぬ。

若紫の巻では、源氏に打解けるまでにはいかずとも、少なくとも源氏に良い感じを抱かせる態度をとり、ひたすら密通露頭を恐れる藤壺の宮。その心理描写はないので呆然自失の態であったかと思われる。しかし穿った見方をするならば文中には、源氏を不快に思つたという叙述はない。やはり源氏に許しても良いという気持ちがあったとは考えにくい。そうしたなやかな藤壺の宮とは打つて変わった彼女が次に現れる。

賢木の巻では、源氏の闖入を知るや否や胸痛を催す。一度目は肉体的支障によって源氏を遠ざけるが、二度目は敢然たる意志で源氏を断固拒否し、嫌悪の情を見せる。この時藤壺の宮が不快に思つたのも当然である。桐壺院亡き今、弘徽殿の太后の思うがままの世において、宮も源氏も、いや立坊した若宮こそが微妙な立場となつているのである。そうした折ならば、まず己の立場をわかまえて身を慎しみ、ひたすら東宮の後见人たる役目を果たさねばならぬはずの源氏が、手前勝手な恋愛感情で東宮と藤壺の宮を窮地に陥れようとしていゝ。恋情を訴えるとして、その恋しい人の迷惑も己の立場も省みない男には不快・嫌悪の念以外の何があるか。しかも、桐壺院亡き今の藤壺の宮には懐妊などということは絶対により得べからざることである。そんなことさえ念頭になく、無体な行為に及ぼうとする源氏を宮ははつきりと、「むくつけう」「心づきなく」感じる。源氏に対してここまでの嫌悪の情を抱いたのは初めてである。また、歌でもって恋心は変わりやすいものであると述べるが、これは宮自

身がもう源氏に恋心をもっていないことを遠まわしに表現しているとも考えられる。

藤壺の宮をして源氏にこうした感情を抱かしためたものとは何か。それは東宮を守るという一念である。この賢木の巻の源氏闖入の場面では、宮はすでに東宮の母たる立場で生きている。つまり花宴(葵)の巻までは源氏の恋人的な面をひきずっていた宮は、賢木の巻での源氏闖入においては東宮の母になっている。それでは藤壺の宮をして東宮の母たらしめたものとは何か。花宴(葵)の巻から賢木の巻の源氏闖入までに宮にこのような変化をさせた出来事とは何か。それは桐壺院崩御とその影響である。その間に起こった、宮をこれほどまでに変えてしまう出来事はこれ以外にない。その根拠を以下に述べる。

花宴の後、桐壺帝は讓位し、弘徽殿の女御腹の朱雀帝が即位し、藤壺の宮と源氏の子である若宮が立坊した。源氏も近衛大将となる。藤壺の宮は讓位後は臣下の夫婦のように院の側近くにいる。讓位から二年、桐壺院は病が篤くなり、もはや快復の見込みはなくなる。院御所へ行幸、東宮の行啓がある。藤壺の宮、「涙に沈みたまへる」(賢木)がとうとう崩御となった。桐壺院を失うということが、自分や東宮にとってどれほどの痛手となるかということにまではまだ考えが及ばず、唯々院の思い出に耽る宮であるが、弘徽殿の太后の勢力下である宮中に参内しづらくなってゆくにつれて東宮の身を案ずるようになる。

内裏に参りたまはむことは、うひうひしく所狭くおぼしなりて、

春宮を見たてまつりたまはぬをおぼつかなく思ほえたまふ。またたのもしき人ものしたまはねば、ただこの大将の君をぞ、よろづに頼みきこえたまへるに、なほこの憎き御心のやまぬに、ともすれば御胸をつぶしたまひつ、いささかもけしきを御覽じ知らずなりにしを思ふだに、いと恐ろしきに、今さらにまた、さる事の聞こえありて、わが身はさるものにて、春宮の御ためにかならずよからぬこと出で来なむとおぼすに、いと恐ろしければ、御祈りをさへさせて、このこと思ひやませたてまつらむと、おぼしいたらぬことなくのがれたまふを、いかなるをりにかありけむ、あさましうて近づき参りたまへり。(賢木)

そして源氏闖入の場面へと続く。この叙述において特筆するべき点が五つある。その一は、今までは自分の身のみを案じていた藤壺の宮が、初めて「わが身はさるものにて、春宮の御ために」という考え方をするようになったこと。二は、祈禱までさせて源氏の恋心がなくなるように念じていることであり、源氏に恋しているのなら彼を遠ざけるのに何らかの葛藤があるはずなのにそうした様子はなく、女性、恋人としての感情が全く見受けられないことである。三は、源氏の恋心を、「憎き御心」と考えていること、四は、ここまですっきり明確な藤壺の宮の心理描写は初めてであること、五は、これ以降の藤壺の宮の発言・行動・心理が意志的になり、かつ描写が詳細になることである。これをどう解釈するべきか。すなわち桐壺院亡き今、自分が東宮を守らねばならないという自覚をもち、東宮の母として生きることを決めたのである。そしてその直後の源氏の

闖入人において、かつてないほどの理性と意志でもって窮地を切抜けるのである。まとめると、若紫の巻から花宴（葵）の巻までが源氏の恋人であり、賢木の巻の桐壺院崩御によって抛り所を失い、不都合な世の中になつていくにつれて、自分が東宮を守るといふ決意をし、以降は東宮、帝の母として生きてゆくのである。（全注）

藤壺の宮が母としての立場で思考・行動する時、その意志に曖昧なところはなく、常に明瞭である。先にも述べたが、人間の己の意志に基づいての発言・行動にこそ、その人間性や人格が見受けられるとの観点に立つならば、藤壺の宮は桐壺帝の后妃・源氏の恋人としては観念的な存在であるが、冷泉帝の母后としてはその人間性がよく描かれているといえよう。

## (一)

そうした藤壺の宮とは逆に、源氏はますます子供じみた態度をとる。藤壺の宮に冷たくあしらわれたことを根に持った源氏は、宮への面当てに内裏にも東宮御所にも参内しない。そうした源氏に宮の東宮への心配は増す。源氏は東宮の後見人であるので、宮が無下な態度をとって、源氏が出家でもしてしまふと実質的な後ろ楯を失うことになる。だからといって源氏が宮の許に忍び寄って恋情を吐露することが絶えなければ、世間に悪い評判がたちかねない。後見人としての源氏が必要だが、恋人としての源氏は不必要である。しかし彼にその分別はない。この難題を解決するために、藤壺の宮は源

氏の恋人となり得ない状態に自らを置くことに決める。すなわち出家である。桐壺院が東宮の事を思つて授けた中宮位も出家すれば保つてゆくことは難しくなる。だが、そうなれば弘徽殿の太后の藤壺の宮への憎しみも少しは治まるだろう。宮が自身が笑ひものになるのを避け、かつ東宮のために源氏を自分との恋愛関係抜きの後見人にするにはこれが唯一最良の手段である。藤壺の宮は出家前に宮中に参内し、それとなく東宮に別れを告げるが、太后の力が強い宮中は宮に對してよそよそしく、こういうことでは東宮の身に悪いことが起こりはしないかと不安になる。それなのに源氏は、「御こちなやましきにごとづけて、御送りにも参りたまはず」（賢木）という有様である。そればかりか、「あさましき御心のほどを、時々は思ひ知るさまにも見せたてまつらむ」（同）との心で雲林院に籠る。帰邸すればしたで藤壺の宮に紅葉を贈るが、その枝には恋文が結びつけられていた。こうした源氏の無分別な行為を宮は顔色を変えて、「うとまし」（同）く、「心づきなく」（同）思い、東宮のことなどを書いた堅苦しい返事をして、源氏をただの後見人として扱うのであった。

藤壺の宮は桐壺院の一周忌の法要と法華八講を催し、果ての日に出家する。

果ての日、わが御ことを結願にて、世を背きたまふよし、仏に申させたまふに、皆人々おどろきたまひぬ。兵部卿の宮、大将の御心も動き、あさましとおぼす。親王は、なかばのほどに立ち入りたまひぬ。心強うおぼし立つさまをのたまひて、果

つるほどに、山の座主召して、忌むこと受けたまふべきよし  
 たまはず。御をぢの横川の僧都近う参りたまひて、御髪おろし  
 たまふほどに、宮の内ゆすりて、ゆゆしう泣きみちたり。何と  
 なき老い衰へたる人だに、今はと世を背くほどは、あやしうあ  
 はれるるわざを、まして、かねての御けしきにも出だしたまは  
 ざりつることなれば、親王もいみじう泣きたまふ。(賢木)

こうして藤壺の宮は「入道の宮」となるのだが、ここにも宮の東  
 宮を守ることへの強い一念を見ることが出来る。そもそも当時の貴  
 族女性とはどのようなものであったか。それについて清水好子氏は  
 こう述べられた。

自分で主體的に判断する、そういうことは当時の貴族の女とし  
 ては想像さえできぬことだった。彼女らは政争の道具として利  
 用されていたが、それだけに表面にあらわれた日常生活では、  
 父や兄に大切に守られかしくかれて、手足を動かすことも、自  
 分で考え判断することさえ必要のない日々を送っていた。<sup>(注2)</sup>

既に述べたが、藤壺の宮は后腹の内親王という生まれの上、現在  
 は中宮の座に即き、東宮の生母たる女性である。平安時代において  
 血統も地位も最高の部類に属する女性が誰に相談することなく自身  
 で出家を決め、当日までその素振りも見せず、また、兄宮の説得に  
 も耳を貸さずに実行してしまうとは、想像を絶する決断力・行動力  
 である。加えて桐壺院の一周忌の法要という国家的忌日直後の法華  
 八講の席で得度式を行うことを計画し遂行している点に注目したい。  
 もしも出家の目的が源氏から我が身を守ることのみであるのなら、

一日でも早く、三条の宮でひっそりと出家するべきである。しかし  
 宮はそうせず故院の法要の直後、多くの人々が参集している中で  
 出家すること、后としての桐壺院への貞節を示し、それに対して  
 感動した人々が俗世に残される東宮に同情するであろうということ  
 を予想していたとも考えられる。<sup>(注3)</sup>このように述べる宮があまりに  
 もしたたかな女性であるように思われようが、もともとこの出家は  
 純粹に求道のためになされたものではないのである。よって、宮が、  
 同じ出家をするなら、より効果的なやり方を選んだとしてもさほど  
 不思議はないであろう。いづれにせよ宮にそうさせたのは東宮の存  
 在以外に考えられない。宮の出家によって源氏が宮の許を訪れても、  
 世間が二人の仲を疑うこともなくなり、それによって源氏と瓜二つ  
 の東宮の出生を怪しまれることもない。かつ、源氏も己の立場を省  
 みて後見人としての役目を果たすだろう。こうした目論見と我が子  
 を守る気持ちなくして宮が東宮の後ろ楯となる中宮の位を捨てて出  
 家することはあり得ない。つまり、東宮の母たる自身の世評と、な  
 により「春宮の御ため」(賢木)であるからこそ、宮は皇族女性ら  
 しからぬ意志力・決断力・行動力でもって出家し得たのである。<sup>(注4)</sup>

### (三)

藤壺の宮の出家によって、さしもの源氏も東宮を慮るようになっ  
 た。そして、東宮のつがいない将来のみを祈念して出家した藤壺の  
 宮は、この後東宮の母としての面をより明らかに見せるようになる。

今や源氏との関係に心を悩ますことがなくなり、源氏の訪問に「御みづから聞こえたまふをり」(賢木)もあるようになった。しかし世間はますます宮によそよそしくなる。

かくても、いつしかと御位を去り、御封などのとまるべきにもあらぬを、ことづけてかはること多かり。皆かねておぼし捨ててし世なれど、宮人どもも、よりどころなげに悲しと思へるけしきどもにつけてぞ、御心動くをりをりあれど、わが身をなきになしても、春宮の御代をたひらかにおはしまさばとのみおぼしつ、御行ひたゆみなくつとめさせたまふ。人知れずあやふくゆゆうし思ひきこえさせたまふことしあれば、われにその罪を軽めてゆるしたまへと、仏を念じきこえたまふに、よろづをなぐさめたまふ。(賢木)

ここに出家後の藤壺の宮の心情がありありと示されている。世の中が変わり、気持ちの治まらないことが多いが、自分はどうなっても東宮の即位が無事に遂げられればとばかり思う。本来帝位に即くべきではない東宮の罪は自分が入道したことに免じて許してほしい、と仏に念じ、自分や家司の不遇にも目をつぶる。客観的に見れば真に勝手な願ひであるが、藤壺の宮の東宮に対する盲目的な母性愛が見受けられる。宮の唯一最大の関心事は東宮の即位であって、源氏のことは全く眼中にない。

須磨の巻で、弘徽殿の太后の勢力下でわが身の政治的危機を感じた源氏は、東宮に累が及ぶことを恐れて須磨退居を決心し、暇乞いに藤壺の宮の許を訪れた。源氏が都落ちする真意を知っているのは

宮唯一人である。源氏が退居すれば東宮は唯一の後見人を失ってしまう。しかし源氏が都に残ってもいずれば罪人として流されてしまう危険がある。そうなれば東宮とて無事では済むまい。罪人を後見人に持ったことにかこつけて廢太子にされていまいかもしれない。別れに望んだ源氏に應對しながらも、宮はひたすら「春宮の御ことをいみじうしろめたきものに思ひきこえたまう」(須磨)ており、退居する源氏本人のことは二の次である。

「かく思ひかけぬ罪にあたりはべるも、思うたまへあはするこの一節になむ、空も恐ろしうはべる。惜しげなき身はなきになしても、宮の御世だに、ことなくおはしまさば」とのみ聞こえたまふぞことわりなるや。宮も、皆おぼし知らるることしあれば、御心のみ動きて聞こえやりたまはず。(須磨)

と、藤壺の宮・源氏兩人の思ひは、「惜しげなき身はなきになしても、宮の御世だに、ことなくおはしまさば」という点で一致する。だからこそ宮は源氏の言葉も心も全て「おぼし知らるる」のだ。二人は歌を詠み交わして別れた。

藤壺の宮は須磨に下向した源氏を思つて嘆くが、それも東宮のためを考えて、その上で東宮の後見人の不遇を思い遣っているにすぎない。

入道の宮にも、春宮の御ことによりおぼし嘆くさま、いとさらなり。御宿世のほどをおぼすには、いかが浅くはおぼされむ。年ごろはただものの聞こえなどのつつましさに、すこし情あるけしき見せば、それにつけて人のとがめ出づることもこそとの

み、ひとへにおぼし忍びつつ、あはれをも多う御覧じ過ぐし、すくすくしうもてなしたまひしを、かばかりに憂き世の人言なれど、かけても、このかたには言ひ出づることなくて止みぬるばかりの人の御おもむけも、あながちなりし心の引くかたにまかせず、かつはめやすくも隠しつるぞかし、あはれに恋しうもいかがおぼし出でざらむ。御返りもすこしこまやかにて、このころはいとど、

塩垂るることをやくにて松島に

年ふる海士もなげきをぞつむ(須磨)

ここに藤壺の宮の今までの源氏に対する感想を見ることができ。子までなした因縁を思えば、通り一遍の気持ちではいられない。今までは世間の評判を慮り、源氏を刺激することを避けるためやさしいそぶりを見せなかったが、二人の仲について悪評がたつことがなかったことを思えば源氏のことも評価せねばならない。そうしたことを、現在の状況についても「あはれに恋しうも」思い出されて心を込めた文を送るのである。

しかし藤壺の宮からの返歌を受けとった源氏の感想は一切記されていない。今までは宮の反応に一喜一憂していた源氏がこの文には何の感想も表さなかったのである。これについて坂本昇氏は、すでに源氏にとっては紫の上が一番愛する女性になっており、それを源氏が認識したからである、との見解を述べられた。<sup>(注5)</sup>それは一理あるように思われる。紫の上を引取ってから八年、彼女は彼女自身の個有的人格を持って見事な女性に成長した。共に暮らしいつも側にいる紫の

上は、いわば実体を伴った女性であるが、藤壺の宮は話すことはおろか顔を見ることがさえままならぬ女性である。それゆえに恋心が助長されるのだから、やはり宮は憧れでしかない。人は失った時にこそ一番大切なものを知る。源氏は退居によって、紫の上が自分にとってどれほど大きな存在となっていたかに気付いたのだ。だからこそ藤壺の宮からの手紙には何の感想も表さなかったのに、紫の上からの手紙を読んで、「夜昼おもかけにおぼえて、堪へがたう思ひ出でられたまへば、なほ忍びてや迎えましとおぼす」(須磨)などと尋常ならず心を動かされるのである。それを裏付けるように、帰京した源氏と藤壺の宮の対面の場面は描かれない。作者は「入道の宮にも、御心すこししづめて、御対面のほどにも、あはれなることもあらむかし」(明石)と語るに止めた。

#### (四)

東宮の即位によって藤壺の宮は国母、准太上天皇となり、仏道修行に専念し、宮中にも思い通りに参内できるようになる。源氏も権大納言を経て、内大臣となる。潯標の巻で源氏は前斎宮を養女として冷泉帝に入内させたいと考えるが、朱雀院も彼女を妃に所望していた。苦慮した源氏は母后である藤壺の宮に、前斎宮の母(六条御息所)との実情を正直に話した上で相談する。

「(前略)内裏にも、さこそおとなびさせたまへど、いとときなき御齡におはしますを、すこしもの心知る人はさぶらはれ

てもよくやと思ひたまふるを、御定めに」など聞こえたまへば、「いとようおぼし寄りけるを、院にもおぼさむことは、げにかたじけなう、いとほしかるべけれど、かの御遺言をかこちて知らず顔に参らせたまつりたまへかし。今はた、さやうのこと、わざともおぼしとどめず、御行ひがちになりたまひて、かう聞こえたまふを、深うしもおぼしとがめじと思ひたまふる」さらば、御けしきありて数まへさせたまはば、もよほしばかりの言を添ふるになしはべらむ。(濡標)

この場面において二人に私的な感情はない。冷泉帝の母と、父であり後見人である人間が会話しているのである。それは源氏が、「母御息所いと重々しく心深きさまにものしはべりしを、あぢきなき好き心にまかせて……」(濡標)と話の口火を切っていることからも分かる。二人の間には落ち着きが戻っているのだ。

この場面の藤壺の宮の言動を彼女の变化と考える人は多い。例えば、清水好子氏は、

この藤壺の態度はなんといままでとちがっていることだろう。

(中略) 今女院である藤壺はその会話の量が多い。秘密の色はうすれ、なまめかしい気配は去りつつある。その代わり、偉大な権力者になりつつある。源氏物語の人物描写の筆は場面によって変わる。藤壺の変身・成長であろうか。物語の筋立の要請であろうか。(余注)

と述べられた。果してそういえるだろうか。藤壺の宮はこの時急に変わってしまったのか。そうではない。

藤壺の宮が母の自覚を持ってから冷泉帝の即位までに、「春宮の御ため」「春宮の御こと」という趣旨の宮の言葉が七回でてくる。先の引用と重なる部分もあるが以下に列挙する。

- (1) わが身はさるものにて、春宮の御ためにかならずよからぬこと出で来なむとおぼすに、(賢木)
- (2) 宮も、春宮の御ためをおぼすには、御心置きたまはむこといとほしく、(同)

- (3) 大后の御心もいとわづらはしくて、かく出で入りたまふにも、はしたなく事に触れて苦しければ、宮の御ためにもあやふく、ゆゆしうよろろづにつけて思ほし乱れて、(同)

- (4) わが身をなきになしても、春宮の御代をたひらかにおはしまさばとのみおぼしつ、御行ひたゆみなくつとめさせたまふ。(同)

- (5) 春宮の御ことをいみじうしろめたきものに思ひきこえたまふ。(須磨)

- (6) 入道の宮にも、春宮の御ことによりおぼし嘆くさま、いとさらなり。(同)

- (7) 入道の宮は、春宮の御ことをゆゆしうのみおぼししに、大將もかくさすらへたまひぬるを、いみじうおぼし嘆かる。

(同)

桐壺院崩御により母の自覚をもつに至った藤壺の宮はそれ以降、冷泉帝のためということを一にして、全てに優先させてきた。自分よりも、源氏よりも。だからこそ宮は源氏を断固拒否し得たのだ

し、誰にも相談せずに若い身空で落飾するという思い切った行動に出たのである。また、濡標の巻のこの場面に限らず、藤壺の宮が母としての立場に立つ時は、その発言・行動は意志的であり、決断力旺盛で、心理描写も細かい。ひたすら、我が子のこのみ思い、悲願の冷泉帝即位が成って国母となった今、より一層積極的になり母としての面をよりはっきりと物語の表面に表わしたとしても何ら不思議ではない。特に驚くべき変化とはいえない。そして我が子が当今であるからには、その子を慮る一切のことは当然、政治色を帯びざるを得ない。

この場面における藤壺の宮は臘月夜の入内を強行した弘徽殿の太后に類似している。宮にとっては分別のある大人の妃を冷泉帝に入内させるためなら、朱雀院の意向などさして重要なことではないし、准太上天皇にして当今の母后、院の義母であれば、十分に院の意向を抑えられる。そして院をないがしろにした上に、兄の兵部卿の宮をも切り捨てた。

宮の中の君も同じほどにおはずれば、うたて難遊びのここちすべきを、おとなしき御後見は、いとうれしかべいこと（濡標）とまで言った。兄宮の姫よりも前斎宮を採ったのである。

絵合の巻は、「前斎宮の御参りのこと、中宮の御心にいれてもよほしきこえたまふ」（絵合）と始まる。そして出家後は主に「入道の宮」と称されてきた藤壺の宮に、「中宮」という呼称が使われる。宮が斎宮の女御を後援するという世俗的な行為が描かれるこの巻では、脱俗の印象がある「入道の宮」よりも当今の母后、女性の第一

人者として「中宮」と呼ぶ方が適当であるためと思われる。

入内の当日は藤壺の宮も参内し、冷泉帝に「かくはづかしき人参りたまふを、御心づかひして、見えたてまつらせたまへ」（絵合）と言う。当今の母后自らが斎宮の女御を支持する裏に、宮が幼い帝に強い影響力をもっていることが分かる。そして宮が斎宮の女御を後援する様子が描かれる。宮の前で行われた私的な絵合では負けそうな斎宮の女御方を強引といっても差支えないほどに応援する。

「兵衛の大君の心高さは、げに捨てがたけれど、在五中將の名をば、え朽さじ」とのたまはせて、宮、

みるめこそうらふりぬらめ年経にし

伊勢をの海土の名をや沈めむ（絵合）

という宮の判定で斎宮の女御方を勝たせる。強引であるということとはそれだけ宮の意志が表れているということである。また、冷泉帝の御前で絵合では藤壺の宮も臨席し、「祿どもは、中宮の御方より賜はず」（絵合）のである。幼い帝に代わって宮が下賜したのであるが、その絵合の主催者の一人が宮であったことを匂わせていると思われる。宮中における宮の母后としての権力がいかなるものか窺えるところである。絵合は源氏の手による須磨の絵日記で斎宮の女御方が勝つ。それは勝負以上に、源氏が自らを犠牲とし、冷泉帝の即位に尽力したことを藤壺の宮や参会した人々に思い起こさせることとなった。

## (五)

きらびやかな絵合で母後の権力を見せてから一年後、藤壺の宮は病に倒れ、もはや快復の見込みはなくなり、行幸がある。宮は死の床で自分の一生を振り返り、「高き宿世、世の栄も並ぶ人なく、心のうちに飽かず思ふことも人にまさりける身」(薄雲)であったと認識する。后腹の内親王として生まれて中宮の座に即き、国母・准太上天皇となった自分を、「高き宿世、世の栄えも並ぶ人なく」と評するのは分かる。では、「心のうちに飽かず思ふこと」とは何か。最高の血統と地位を有した女性が心中ひそかに飽き足らなく思うこととは何か。それは我が子冷泉帝が出生の真実を知らずにいることである。さらに宮の心理描写は続く。

上の、夢のうちにも、かかる事の心を知らせたまはぬを、さすがに心苦しう見たてまつりたまひて、さすがにこれのみぞ、うしろめたくむすばほれたるにおぼし置かるべきこちし  
たまひける。(薄雲)

冷泉帝が、実の父が源氏であることを知らないのがいたわしく、このことだけが気がかりでこの世に思いが残りそうだと宮は思っているのだ。死の床においても宮の心にあるのは我が子のことだけであった。「心のうちに飽かず思ふこと」を源氏との恋を成就できず、拒否せねばならなかったことと考えるむきもあろうが、藤壺の宮の一生を客観的に考察して、そのように考えるのは無理がある。宮は

自分への恋を訴える源氏を疎ましく思い、断固拒否して出家したが、それは別段宮の意志に反したことでなく、宮が自ら考え、行動したことである。退居した源氏を思うのも東宮のためという規定に沿ったものであり、恋人としての源氏に心を配ったのではない。その上少なくとも宮が源氏に恋していた時期は花宴(葵)の巻きまでであり、その後の十年近くを母として生き、八年間仏道修行をしてきたのである。理知的な「入道後の宮」である藤壺の宮がそうした年月を経てもなお源氏とのことを飽き足らなく思うとは考えにくい。

源氏が宮を見舞い、宮は最後の言葉述べた。

院の御遺言にかなひて、内裏の御後見つかうまつりたまふこと、年ごろ思ひ知りはべることも多かれど、何につけてかは、その心寄せことなるさまをも漏らしきこえむとのみ、のどかに思ひはべりけるを、今なむあはれにくちをし。(薄雲)

女房が側に居り、宮の言葉も女房の口で伝えられるのだから、直接的に気持ちを表すことはないだろうが、もし源氏とのことを、「心のうちに飽かず思」っているのなら、己の死に臨んで聡明な宮はその気持ちをうまく仄めかすだろう。しかしその言葉は冷泉帝に関することのみであり、そこに何らかの個人的感情、特に好意などは見えない。「院の御遺言にかなひて」との言葉をまず述べることからも分かるように、宮は冷泉帝の母后、及び桐壺院の后としての立場に立っている。そして公の謝辞を最後に源氏に永遠の別れを告げたのである。(注8) そうした宮に対して源氏は取乱して涙にくれ、あげくのはてには自分も「世にはべらむことも残りなきこちなむしは

べる」(薄雲)と、まるで夫婦か恋人のような口調で話す。そのような源氏の言葉が聞こえたのか否か、藤壺の宮は、「燈などの消え入るやうにて果て」(薄雲)た。仏の涅槃になぞらえられる国母の崩御である。

(注1) 藤壺の宮が母の自覚をもったのはいつであったかという問題について坂本昇氏は次のように述べられた。

「藤壺が母としての己の立場を自覚したのは御子を出産した時であり、御子のために生きることを決意したのは皇后に立った時と見ることが出来る。出産の時と立後の時に、藤壺の変化の起点があると見られる。」(『源氏物語構想論』一三〇頁)

出産、立后によって母の自覚をもつに至ったと考えるのは難しいと思われる。どちらの折にも藤壺の宮の変化に乏しく、それらしい描写、叙述も見えない。変化の起点とするには説得力に欠ける。源氏に心惹かれていた宮が大きくかわったことが初めて分かるのは賢木の巻の源氏拒否である。本論で述べたとおり、こうした変化をさせるに足る事件は桐壺院崩御のみであり、その直後に初めて宮が東宮を案じる様子が描かれている。

(注2) 『源氏の女君』(一三三頁)

(注3) 同様の考えを玉上琢彌氏が、『源氏物語評釈』(第二巻五九〇頁)に述べられている。

(注4) 藤壺の宮の出家について佐久間啓子氏はこのように述べら

れた。

「こうして「人笑へ」という意識と、自己を超克することが結びついたかたちで出家した藤壺にとって、現実的にはもはや源氏の忍ぶ振舞もなくなり、彼が愛の言葉を漏らさないことによって秘密は保たれる。そして過去の過ちはたとえ人の口の端にのぼらなくても消え去ることなく厳として存するものであるが、女であるということすべて脱ぎ捨て去ったことによって、(それはちょうどきらびやかな錦や綾から鈍色の墨染衣に変わったように)、現世における藤壺の、なき院に対する罪のあがないとなったのである。」

(「源氏物語の女性像 藤壺」・「平安朝文学研究」第二卷第七号四七頁)

藤壺の宮の出家はあくまでも東宮の保身と将来のためであることを忘れてはいけない。そしてまた、出家することは桐壺院への罪のあがないにはならない。東宮を守るために宮を立后させたのは院であり、よって出家して中宮位を保ってゆけなくなるのは院の遺志を無にすることになる。それでも宮が出家したのは、状況を踏まえて、東宮の安泰のためには自分の出家が必要であると判断したからである。難しい状況下で、東宮を第一に考える宮の心に、「なき院に対する罪のあがない」のために院から与えられた中宮の座を捨てて出家するという意識があるだろうか。それはいささか感傷的すぎる見方と思われる。

(注5) 『源氏物語構想論』(一四四頁)

(注6) 『源氏の女君』(二三八～三九九頁)

(注7) 「心のうちに飽かず思ふこと」については様々な解釈がある。以下諸説を挙げる。

(1) 「源氏に愛情は抱きながらも拒まねばならなかったこと」

(『新潮日本古典集成 源氏物語』二 一六六頁)

(2) 「源氏といっしょになれないこと(玉上琢彌『源氏物語評釈』第四卷一八八頁)

(3) 「①源氏に対する愛を充たし得なかったこと、②冷泉に実父の誰なるかを教え得ぬままに終わること」(上坂信男『古代物語の研究「長篇性の問題」三八六頁)

(4) 「帝が真実を知らずにいること」(坂本昇『源氏物語構想論』一四九頁)

(注8) 藤壺の宮の最後の言葉については様々な解釈がある。以下諸説を挙げる。

(1) 「そこにはこれが精一っぱいの相手に対する愛情の告白と、感謝と、そして切ない別れの情が交わされているのを見る事ができる。」(斎藤暁子『源氏物語の研究 光源氏の宿痾』二五頁)

(2) 「『うちの御後見つかうまつり給ふこと、年ごろ、おもひ知り侍ることおほかれど』とのみ言えば、源氏の帝に対する後見の態度に依ってあなたの意中は理解していたとも取れるが、この上に『院の御遺言にかなひて』の一

言がついている。従って、帝及び藤壺と源氏が個人的な感情を交す間柄と認めての言葉ではない。源氏の行動が故院の遺言に適うものであることは認めていたと、皇后たる立場で藤壺は述べたのである。」(坂本昇『源氏物語構想論』一二六頁)

(3) 「源氏物語の『心よせ』の用例のうち、その三分の一は男女の恋情を意味している。が、宮の『心よせ』は、あくまでも故院の遺志を遵守した光源氏の冷泉後見に集中されていて、ここは、あくまでもおおやけざまの謝辞である。」(木船重昭『源氏物語の研究(続)』一三四頁)

(4) 「藤壺の宮のこの最後の言葉にも、源氏が桐壺院の遺言を忠実に守って、万遺漏のないように冷泉帝(春宮)の後見役を勤めてくれたことを高く評価し、感謝するだけであった。秘めている思いをついに漏らさなかったのだというような様子も見えない。」(阿部秋生『藤壺の宮・「實踐國文學」第二十九号一二頁)

## 五 結び

「結び」にあたって、まず清水好子氏の見解を示そう。同氏は『源氏の女君』(二二頁)で次のごとく述べられた

クライマックスの恋の場面でも、藤壺宮を「おんな」とも「おんなぎみ」もしくは「おんなみや」とも呼ばなかったのは、光

源氏にとって、彼女は理想の恋人だったからである。その身分も、父帝の妃であり、光源氏の手の届かぬところに眩しく輝く。彼のまわりをとりまく幾多の女性と同然にされてはならないし、思慕の心は絶対にあらわしてはならなかった。

源氏にとって、藤壺の宮が理想の恋人であることは確かである。

そのために源氏は紫の上を引取り、女三の宮と結婚するのだから。しかしそれはあくまでも源氏にとっての藤壺の宮である。源氏が主人公である以上、源氏の幼い頃からの憧れである宮が、源氏の恋人と認識されがちになるのは仕方がないのかもしれない。が、宮が一人の人間、女性としてどのように生きたのか、それはまた別問題である。その答えは、宮が恋の場面でも、「おんな」とも「おんなぎみ」とも「おんなみや」とも呼ばれていないことから窺い知ることができる。つまり作者は藤壺の宮を源氏の恋人である「おんな」としてではなく冷泉帝の母として設定しているのだ。だから桐壺帝の後妃、源氏の恋人としての宮と、冷泉帝の母后としての宮では、発言・行動・心理の描写という、人間の人格や人間性を表現する手段において、はっきりとした差があるのである。また、藤壺の宮は我が子の即位を見届け、自分に代わって冷泉帝の世話役となる大人の妃を人内させて後援し、絵合の勝利によって斎宮の女御の後宮での地位を磐石にし終えてから死を迎える。見方を変えれば、作者はそれによって宮の母としての役目が終わったと判断し、宮を物語世界から退場させたといえよう。

藤壺の宮の眞の人生は母の自覚をもってから始まった。そして命

の尽きるその時まで我が子を思った。宮の一生は冷泉帝あってこそであり、母としての役割を最重要とした人生であった。

(付) 本文引用は『新潮日本古典集成』によった。

本稿を成すにあたり、御指導賜わった西木忠一先生に、篤く御礼申し上げます。